

第10章 ● 「生態移民」をめぐる住民の自然認識

——甘肅省肅南ヨゴル族自治県A村における事例から

シンジルト

はじめに

本章において筆者は肅南ヨゴル（裕固）族自治県でおこなった調査に基づき、まず「生態移民」政策の影響下にあるA村の住人が抱える日常生活の諸問題を概観し、それらの問題をめぐる人びとの語りから彼らの「生態移民」に対する考え方を抽出する。そしてその考え方の背後にある地域の開発史と彼らの自然認識に代表されるローカルな論理のありようを浮き彫りにし、さらに彼らがその論理をいかに維持しようとしているのかをみることで、人間と自然との共存の可能性をローカルな論理のなかに探る。

調査地における噂^{*1}

調査地の概要

A村は祁連(チレン)山自然保護区のなかにあるスタロン(寺大隆)林場(営林署に準ずる機関)の所管する地域に位置する。祁連山自然保護区の正式名称は、「甘肅祁連山国家級自然保護区」であり、シルクロードとチベット高原の間にあり、その西は玉門石油河、東は永登連城自然保護区と接する。その位置は、東経九七度二五分〜一〇三度四六分、北緯三六度四三分〜三九度三六分であり、そのなかには天祝チベット族自治県、肅南ヨグル族自治県、古浪、涼州、山丹、民樂、甘州、永昌などの県や区が含まれ、総面積は二六五万三〇二三ヘクタールである(李柏春ほか 二〇〇三・三三、甘肅省八届人民代表大会常務委員会 一九九七)。

当保護区を管理しているのは、省の林業関係の行政部署の派出機関「甘肅祁連山国家級自然保護区管理局」である。管理局の下に管理站(管理ステーション)が計二二ヶ所設置されている。管理站は、管理局と同時に所在地の地方行政の指導も受ける(甘肅省八届人民代表大会常務委員会 一九九七、安金玲 二〇〇二)。保護区の任務は、森林と野生動物を保護することである。

当保護区は、核心区(七万二五六〇ヘクタール)、実験区(三九万ヘクタール)、経営区(二一九万四〇〇ヘクタール)に分類される。「甘肅祁連山国家級自然保護区管理条例」第二二条によると、核心区とは、「生態系が天然の状態で保たれており、絶滅に瀕している希少な動植物が多く分布している地区を指す」。そのため、「いかなる組織も個人もこの核心区へ進入することは禁止されている」とし、「当該地域の人民政府は、区内に居住している人びとを計画的段階的に転出させる必要がある」と規定する(甘肅省八届人民代表大会常務委員会 一九九七、安金玲 二〇〇二)。

祁連山自然保護区の核心区のひとつが、肅南ヨグル族自治県康楽区に位置するスタロン林場である。その位置は、東経九九度三一分一〇〇度一五分、北緯三八度一四分一三八度四分である。黒河上流の下部にあり、高原寒冷半乾燥気候帯に属する。総面積は一七・五万ヘクタールであり、森林がその二六・三パーセントを占める。木材の蓄積量は二二万四七〇〇立方メートルである。年平均気温は〇・七度で、一月平均気温は零下二・九度、七月平均気温一二・二度である。年平均降水量は四三三・五ミリメートルで、年間変動幅三二六・四〜五三九・七ミリメートルの間にある。最大は五三九・七ミリメートルである。植物として、青海雲杉 (*Picea crassifolia*) と祁連山山柏 (*Sabina przewalskii*) など五〇〇余りの希少樹種がある。約二三〇種の野生動物が棲息し、金や石炭などの地下自然も豊富である(張虎ほか 二〇〇二、常学向ほか 二〇〇二、陳剛 二〇〇二)。

■生態移民の噂

黒河へ注ぐ多くの小川と大規模な原生林をもつA村は、豊かな自然に恵まれている。住民のほとんどが牧畜業を営むヨゴル族の人である。一九五〇年代末から一九六〇年代初めにかけて、とりわけ「三年自然災害」とされる時期において、飢餓に耐えきれない大量の漢人農耕民が野生動物の多い爾南ヨゴル族自治県に來たといわれる。A村にも民衆県などから漢人が大勢押し寄せてきたという。移住当初は、ヨゴル人牧畜民に食料などを援助してもらっていたが、その後、彼らは牧畜民の放牧の手伝い、大工仕事に従事するようになった。一九八三年まで同村に十数世帯の漢人がいたが、その一部は、一九八三年頃に故郷に帰還した。二〇〇四年現在A村の総世帯数五七の内訳は、ヨゴル人世帯が四六、漢人世帯が九、チベット人世帯が二である。

調査は二〇〇四年二月におこなわれた。その間、筆者はおもに牧畜民H氏の家を拠点に、彼や彼の親戚の案内でA村の各地をウマで移動しながら、一〇世帯近くの住民に対して聞き取り調査をおこなった。筆者のおもな調査項目は、人びとの語りにあられる当地域の近代史、伝説や禁忌などにみられる人びとの自然認識であった。だが、多くの場合、筆者の関心とは別に、村人の話は、しばしば「生態移民」ということに切り替えられていった。彼らが最も関心を寄せているのは、自分たちがこれから移住させられるのではないかということであった。つまり今まで住み慣れた祁連山脈の森林地帯から平原地域の「開

発区」へ移住し、先祖代々おこなわれてきた放牧生活から農耕生活へ移行させられることに、彼らは不安を感じていたのである。

多くの村人は「この調子では、あと五年もたたないうちに、われわれはこの地から転出しなければならぬだろう。生態保護・森林保護・野生動物の保護などを提唱する政府は必ず、われわれを移住させるだろう」と推測する。そこで、「われわれ牧畜民は先祖代々家畜とともに生きてきた。これから農民、商人、労働者になれというのだ。けれども今まで秣でさえ植えたことのないわれわれに、そんなことをいっても、しよせん無理な注文だ」と、今後の生活に希望をもてなくなった人びとは不平を漏らす。

だが、A村の村人がただちに移住しなければならないことを示す政府自治体側が制定した文書や通達の内容を確認することはできない。その意味で「客観的な根拠」に欠けるA村の人びとの語りは、嚙程度のものにすぎないのかもしれない。ただし、事実として自治県内の他の地域においては移住がすでにおこなわれ、またいくつかの「農業開発区」がすでに設立された。身の回りで起こっているこれらの出来事や彼らが居住する森林地帯がすでに自然保護区の核心区に分類されている事実もあるなか、A村の人びとが口にする推測は、単なる憶測以上の現実味を帯びているともいえる。

人びとの生態移民への不安は、聞き取りでの話題が、いつのまにか「生態移民」に切り替わってしまうことだけでなく、A村の光景からも読み取れるように思う。多くの牧畜民は一九六〇年代以来定住している。定住生活には、恒久的な住居を建てる必要があるが、いまだ、彼らの多くは家の本格的な建設には着

手できないでいる。定住生活を始めてから現在までは三〇年、四〇年間にわたって、当時建てられた老朽化が進む住宅で生活を営む世帯が圧倒的に多い。交通の便の悪いA村の住人にとって、建築材料を仕入れることは巨額の出費を意味する。したがって、家を建てようとすれば、それなりの出費を覚悟しなければならぬ。こうした経済的な要因に加えて、多くの牧畜民は、「近い将来移住させられるかもしれない」という不安から、長期的な計画を立てられず、家屋の新築に踏み切れないのである。

働きかけられる森

■ 征服された森

人びとが恐れる放牧地域での「生態移民」推進政策は、牧畜民を他地域へ移住させることで、過度放牧による森の破壊を食い止めるという論理に依拠している。一方、A村の人びとに言わせれば、森が減少したのは自分たち牧畜民のせいではなく、一九五〇年代以降当地域において組織的におこなわれた大規模の森林伐採によってもたらされたものだという。

じつは、スタロン林場は、現在保護区に入っているものの、木材伐採地として扱われた歴史のほうが長い。当林場は一九五六年に設立された（陳剛 二〇〇二）。林場が設立されてから当地域における森林伐採

が始まり、張掖から林場までの専用道路が開通した一九七〇年代以降は急ピッチでおこなわれた。とりわけ一九七一年から一九七八年にかけて、「木材を満載したトラックが毎日一〇〇台余りのペースで木材を運び出していた」と語る村の老人たちは多い。一九五〇年代における森林伐採の様相について、老人ロブザンゾドバ（羅布蔵皂巴）は次のように語った。

「（前略）一九五八年に、上からの命令にしたがい、山のなかに住んでいたヨゴル人と農村から来た人と一緒に、山に登って、原生林を伐採した。切り倒した木を、ヨゴル人のヤクをつかって雪山の上まで運び、燃やした。というのも、そうすることで、雪山を川水に溶かし畑を灌漑したり、ダムを建設したりすることができると上から言われたからだ（後略）」（鉄穆爾 二〇〇四）

ここで言及されている時期が「大躍進」の時代であることを考え合わせば、森林伐採がおこなわれたというA村の人びとの語りは、かなり信頼できるもののように思われる。また、A村で森林伐採がおこなわれていたことを示す痕跡は、住人たちの記憶以外、研究者たちが書いた学術論文にもみられる。たとえば、以下の土石流と害虫に関する論文がそうである。

一九七二年八月に、スタロン林場の所在地付近で、天滂池（ヨゴル語で「シケ・ノール」）谷において土石流が発生した。高さが八メートルにも達する土石流が、数百トンの巨石や十数メートルの高い樹木

を巻き込みながら、面積約一三・三平方キロメートルの谷全体を飲み込んだとする報告があった（王景栄一九八三）。その発生原因が森林伐採と直接関係するかどうかは定かではない。が、被災損害に関する以下の記述からも、当時大規模な森林伐採がおこなわれたことが読み取れる。

「総流量が一〇〇立方メートルと推測されるこの土石流によって、谷の内にあつた三〇〇トンの石炭が流され、谷口にあつた林場新設の宿舍三棟が崩壊し、木材加工工場の四棟の作業建物が飲み込まれ、保健所の建物一四棟が埋められ（うち一一棟が崩壊）、沿岸に置かれていた原木三五〇〇立方メートル（中略）が流されてしまった（後略）」（王景栄 一九八三）

そして、大量に伐採され、適時に運び出されなかつたため繁殖したキクイムシ（蠹虫）を予防する方法に言及した論文は次のように綴る。

「スタロン林区は現在祁連山で最大の青海雲杉原生林である。一九七〇～一九七四年該当林区において伐採（経営択伐）がおこなわれたが、交通状況が悪く伐採現場の整理が不十分であつたため、一部の木材が長年放置されてきたままである。それが原因になつてキクイムシの繁殖が蔓延し、水源涵養林の生息を危機的状况に追い込んでいる」（傅輝恩ほか 一九八四）

さらに、二〇〇一年末の『甘肅日報』には、祁連山自然保護区に関する報道記事が掲載されている（侯煜ほか 二〇〇一）。記事のなかで、劉賢徳、元張掖祁連山水源林研究所所長は、当地域最大の都市である張掖市を襲う旱魃の発生原因とスタロン林場においておこなわれた森林伐採との関係について次のように語っている。「地球温暖化の問題を別とすれば、われわれが祁連山に対して貪欲に搾取した結果が、森林資源の大量破壊をもたらしたので、われわれは現在必然的に大自然の復讐を受けている」。記事は次のように続く。「一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、いわゆる『農業上山』『林業下山』といったスローガンのもとで、多くのマツヤカシワなどの樹木が伐採された」。そのため、「祁連山水源涵養林の面積が解放初期から一九八〇年まで計二二万六九〇〇ヘクタール減少した」。とりわけ、祁連山自然保護区の核心区となるスタロン林場における当時の様子は、次のように描かれている。

「一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、森林企業が次々とスタロンに拠点を構えて木材加工に専念した。マシンスローの音も絶えず、トラクターの列も切れることはなかった。地域で最もよい病院もスタロンに移ってきた。けれども、時間がたった現在は、森は小さくなり、木材は減り、企業は閉鎖し、病院も撤回され、人びとも立ち去ってしまった」（侯煜ほか 二〇〇一）

祁連山スタロン林場を含む甘肅省の林業の誕生と変遷は、中国の社会主義革命と建設と密接に連動して

いる。甘肅省林業庁の王順彦が言うように、「甘肅省の森林産業は一九五〇年代の大躍進時代に発足した」(王順彦 一九九四・五四)。「工業、農業、国防、科学技術、文化や教育といった領域における社会主義建設のため」、甘肅林業は国家に大量な木材を提供してきたとされる。たとえば、一九九九年までの五〇年間において甘肅林業の「木材生産量は累積二六〇〇万立方メートルに達した」(本刊編集部 一九九九)。
そのなかで、スタロン林場がその設立から一九九〇年代まで、「八万五〇〇〇立方メートルの木材、一億元の税金を国におさめてきた」(陳剛 二〇〇二)。

大量伐採の結果、「一九八八年に、祁連山の森林面積は解放初期の五一九万畝から二二二・八万亩、約六〇パーセントまでに減少した。地域全体に占める森林面積も一九五〇年代初期の二二・四パーセントから一四・四パーセントまでに減少した」(李鉄 一九九八)。このように、森は開発や建設とともに、征服され、破壊されてしまった。

■保護される森

伐採技術の革新によって伐採の効率が上昇し、甘肅省での森林伐採の規模拡大につれ、今度は過度の伐採が問題視されるようになった。一九八〇年代以降はそのスピードは徐々に落とされていった。一九八〇年代初期から甘肅省において、祁連山水源涵養林の保護をめぐってさまざまな政策が実施されるようになった。一九八七年には、祁連山が甘肅省級自然保護区に認定され、翌一九八八年には、国家級自然保護

区に格上げされた(李小林ほか 一九九八)。そのため、スタロン林場など、祁連山にあった二二の国营林場は、保護区管理站到看板をつけかえたのだった。

一九九八年、長江と黄河の上流域における天然林伐採を停止するという国家の判断に従い、甘肅省は一九九八年一〇月一日から天然林資源保護事業を開始した(郭利華ほか 一九九九)。そこで、保護区管理站に変身したスタロン林場は現在、国によって提唱される「天然林保護プロジェクト」に貢献すべく、山を閉鎖し、苗木を栽培し始めた。近年、林場外部へ毎年苗を一〇〇万株余り提供するようになった(陳剛 二〇〇二)。

林場から管理站への変更は、森を征服する時代から保護する時代に入ったことを象徴している。この時代的な変革の影響を、最も直截に受けるのは、森に住住してきた住人である。なぜなら、彼らは、森林保護の時代にあつて「森を保護するためには、森を出なければいけない」という生態移民の論理構造のなかに位置づけられてしまったからである。

祁連山に位置し、黒河の上流域に占めるスタロン林場の場合、この「生態移民」の論理は、次のような構成で、導き出された。

① 数十年來、祁連山の生態系が悪化して氷河が後退し、雪線が上昇し、水源涵養林の機能が低下したため、祁連山から流れ出る水の量が減少した。

② それが黒河主流の水量の減少につながり、黒河中流域の地下水の水位下降や下流域の河川湖沼の消

失をもたらし、最終的には砂漠化と黄砂を生み出した。

- ③ 問題の原因はさまざまであるが、祁連山の水源涵養林における人間の行動が最も重要な原因である。
- ④ そのなかでも、天然林の核心区でおこなわれている牧畜業が問題であり、森林と牧畜との矛盾、つまり「林牧矛盾」の解決が要である。
- ⑤ 「林牧矛盾」を解決するには、「封山育林」（山を閉鎖して林を育てる）が最も有効な方法である。
- ⑥ 「封山育林」のためには、「退牧還林」（牧畜をやめて牧草地を森林に戻す）を実施し、「生態移民」をおこなうべきである。

⑦ 「生態移民」を実施するにあたり、以下の三つの条件のもと、機は熟したといえる。（a）国家は「国発（二〇〇二）一〇号通達」を發布し、「生態環境的に重要な地区に居住する住民（中略）に対して生態移民を実施する（後略）」と規定した。（b）甘粛省は、「甘粛祁連山国家级自然保护区管理条例」の第一二条で、祁連山自然保护区の核心区を全面的に閉鎖保護するため、区内の住民を移民として早急に外部へ転出させることを決定した。（c）張掖市には、すでに「生態移民」をおこなう条件が備わっている。すなわち、一九九〇年代において、高台县の駱駝城、肅南ヨグル族自治県の許三湾、張掖市の石崗墩などの農業総合開発区を一〇ヶ所建設しており、生態移民を受け入れる条件が整っている（陳大慶ほか 二〇〇三、王多尧 二〇〇一…五三一五四、陳金元 二〇〇〇…二三六、趙成章ほか 二〇〇四二〇七一—二〇八）。

タブー視される森

■村人と自然

「生態移民」を推し進める論理は、「これまで破壊されてきた森を、これからどう救済すべきか」に焦点をあてており、「だれによって、なぜ、森が破壊されたのか」については、ほとんど関心を払っていない。前節での検証からわかるように、外部の人間によって森が破壊されたとの村人の指摘は偽りではなかった。村人は、森林破壊の理由やその森林破壊が地域全体の自然環境や住民生活にもたらした影響について、語気を強めて、次のように話してくれた。

「もし林場や林場道路がなければスタロンの森林は依然そのまま残っているはずであり、われわれの生活も豊かなはずだった。けれども現在、森林が減ったため山崩れが発生し、降水量も減った。雨が減ったため牧草も枯れている。今われわれは乾燥した木（死んだ木）を使うことにも金を払うことが義務づけられている。そういうなら、湿っていた木（生きていた木）を大量に倒した林場はなぜ責任をとらないのかとわれわれは林場の人間にも言ったが、彼らは、林場は当時国の指示にしたがった

だけだというのだ」

さらに大がかりな森林伐採がおこなわれはじめた一九五〇年代以前の状況と比較しがなら、老人たちは森林破壊と野生動物の減少との因果関係について次のように述べる。

「その頃、この山々には多くの野生動物がいた。クマやオオカミなど肉食動物も常時出没するため、地元の間人は夕方頃になると独りで外の外出を厳しく制限していた。そして樹木が密集していたため森のなかに迷って行方不明になる人もいた。現在、山は禿げて人間が迷うこともなくなつたが、シカや野生ヤクなどは姿を消した」

「生態移民」の論理の基本においては、牧畜民は自然との対立的存在として位置づけられている。しかし自然保護の厄介者として位置づけられたA村の牧畜民たちは「森の破壊は牧畜民のせいではない」と否定する。自分たちが森林破壊の元凶ではありえない根拠を、彼らは自分たちの慣習に求めながら次のように説く。

「われわれにとって人間の命はせいぜい一〇〇歳前後だが、樹木などは数百年も長生きする。われ

われは長生きするものに手出しすることはできない」

樹木の存在はヨゴル族にとって尊崇すべき対象であるのみならず、ヨゴル族全体の未来のありようを示すものとして認識されている。たとえばA村には次のような言い伝えがある。スタロン河の西に位置するツアガン・ダバーン（地名「白い峰」）にはとても高い一本の「トスン・ハラガイ」（アカマツ）があった。そして、スタロン河の東に位置する樺木溝オポーという山には「シケ・ノール（大きな湖）」があった。シケ・ノールはツアガン・ダバーンから数キロメートルも離れていた。それにもかかわらず、シケ・ノールにはトスン・ハラガイの逆さ影が映るといふ。この伝説はトスン・ハラガイの巨大さを物語っているともいえよう。この奇跡のような風景がまだ見られていたとき、ヨゴル人たちの生活はとても幸せだったというのである。夏になると湖には「ガロー」などの鳥がよく卵を産みに来ていたものだ。昔の様子を語る老人は多い。とにかく、そのときのヨゴル人はとても豊かであったと信じられている。どれほど豊かなのか。当時のヨゴル人の娘たちは、今でいうと貴重なバターを玉にして、雪合戦するように互いに投げ合って遊んでいたほどだったという。

だが、いつかはわからないが、ある「悪いやつ」がそのトスン・ハラガイを伐採してしまった。そのため、シケ・ノールの水が漏れ始め、湖も崩壊してしまった。そのときにあるカンブ・ラマ（地位の高い僧侶）はシケ・ノールが崩壊したらヨゴル族は没落すると予言したという。その後、予言どおり、彼らは分裂し、



写真10-1 H氏宅の水汲み場

手前に見えるのはA村ツァガン・ダバーン集落のH氏宅が所有している泉であり、右はその森である。この森のなかに、伝説の「トスン・ハラガイ」があったとされる。写真の正面奥に見える谷の上部には「シケ・ノール」の遺跡がある。A村における自然をめぐる禁忌は樹木に限らず、水、とりわけ、泉に関しても同様である。たとえば泉の源で水を汲んだりすることが禁じられている。この日も、H氏(写真の中央やや左側)は泉の源から二十数メートル離れたところで水を割って水を汲んでいる。

各地に散らばり、貧しく、落ちぶれてしまったという。シケ・ノールの崩壊によってヨゴル人が今日衰弱したのだから、その湖を再建して自らの現状をすこしでも改善しようと部落の長や年寄りたちに動員され、村人たちは数回にわたって水を止める工事をおこなったが、いずれも失敗に終わった。

シケ・ノールは漢語で「天滂池」というが、シケ・ノールに関する言い伝えと前節で言及した一九七二年の土石流そして森林伐採と関係があるか否かは明らかではない。が、言い伝えにおいても、現実においても、A村の人びとにとってシケ・ノールという湖は重要である。

シケ・ノールと同様に重要であるのは樹木である。樹木の具体的な種類や名前にかかわ

らず、森林に恵まれているA村のヨゴル人は、あらゆる樹木を「ノイタン・モドン」と「ホーライ・モドン」との二つのカテゴリーに分類する。前者を直訳すると「湿っている木」、意訳すると「生きている木」になる。反対に後者は、「乾燥した木」したがって「死んだ木」となる。そこで、彼らはノイタン・モドンには命や魂が宿っていると認め、ノイタン・モドンを切り倒してはならないという。なぜなら、ノイタン・モドン、つまり生きている木を倒すことは生きている人を殺すのと同じ罪になると代々親に教わってきたからである。したがって、家を建てる建築材として、あるいは燃やすための薪として、その使用が許されているのはホーライ・モドンに限られる。ホーライ・モドンにしても、比較的大きなものを切り倒す前には、昔は、説経したうえで、村の老人が先に象徴的に斧を入れる手続きが必要であったともいわれている。そして、こうしたタブーを犯した者に対しては、一定の制裁が設けられている。そういう意味において、彼らは樹木などに代表される「自然（外界）」に属する存在のほとんどを人格化し、人間同士の関係の延長として「自然」と交渉しているといえよう。

一方、森をめぐる国家の政策の論理では、それを「征服」する時代においても「保護」する時代においても「人間」と「自然」との関係は、二項対立的だといえる。これに対して、上でもみたとおり、村人の論理の特徴は、「人間」と「自然」は二項対立的ではないということにある。

■ 噂への対応

ヨゴル人出身の歴史・文学者であるテムル(鉄穆爾)氏は、「失われゆく我が祁連山」という文章において、次のように言う。「草原開墾、灌漑農業、森林伐採、鉱山開発こそ」、祁連山水資源欠乏の原因であるにもかかわらず、近年の各種の通達や報告書においては、あたかもそのすべての原因が「牧畜民の過度放牧」にあり、したがって負うべき責任は「山のなかの牧畜民とヤギやヤク」にあるかのような記述が主流になっている(鉄穆爾 二〇〇四)。

たしかに、森の民であるA村の人びとにとって、森林伐採を意味する「征服」の時代より、森を大切にしようとする「保護」の時代のほうが望ましい。一方、自然保護の波が一九九〇年代以降高まってくるにつれ、自分たちは故郷から追い出されるのではないかと、地域住民は危機感を抱き、不安に苛まれている。移住したくないといっても、そしてそれには正当な理由があったとしても、生態移民にまつわる大きな論理、そしてその論理に支えられている身の回りの諸々の制度や政策などを無視することは、もはやできない。こうしたなかで、A村の人びとは、故郷に居残る方法を模索する。将来避けられないであろう「生態移民」問題をめぐって、彼らは知恵を絞った末、次のような案を考え出している。

「林場の護林員は国家の幹部だから彼らはほかの地域で働いても問題がないはずである。けれども、

われわれ地元の間はこの土地に残るしかない。自然保護のためにわれわれはなるべく家畜を減らす。たとえば、いままでヒツジを一〇〇匹飼っていたとしたら、これからは五〇匹までに減らす。その五〇匹は牧畜生活をすぐ放棄することが困難な老人たちに任す。若い世代は護林関係の仕事につき、全精力を自然保護に注ぐ。われわれは林場の護林員より土地のことを知っている。われわれこそ護林員の職に適している」

祁連自然保護区内において建国以来四六年間森林火災がなかったため、保護区の核心区スタロン林場を抱える爾南ヨゴル族自治県は國務院から「無森林火災県」との名譽ある称号を授与された（戴興忠一九九七）。そして、「森林火災はなかった」功績を、それは「各民族人民の努力」だと表現する人もいる（李小林ほか一九九八）。ただし、それは、牧畜民たちが森林火災防止に受身的に「協力」したのではなく、むしろ主体的に「防止」した結果だといえる。彼らはその地域の古くからの住人であり、険しい山道での乗馬に慣れており、どこどのような木が乾燥しており、燃えやすくなっているのか、いったん火事になったらどのようなルートで一番早く現場に到着できるかなどを熟知している。現に林場の護林員たちが火事防止のため森を巡回する際に、すべてのところに行くことが不可能であるため、森の住民である牧畜民の居住地を訪れ、森の状況を彼らに問い合わせる。つまり、護林員たちはある意味で、牧畜民たちの知識に頼らなければ、火災防止など、自らの仕事を全うできないのである。

牧畜民たちの存在が不可欠なことは、林場側の護林員たちも十分に認めていた。が、牧畜民たちの「自ら護林員になる」との提案に対する彼らの反応は、つれないものである。林場側の説明によれば、護林員の招工（募集）は国家の統一試験をとおしておこなわれており、戸籍上農耕民や牧畜民はその例外となるという。つまり現在では、国家の幹部ないし企業労働者という枠内（職工指標）で募集がおこなわれているため、牧畜民である地元の間には護林員になる機会はない。いいかえれば、都市の間でなければ、漢語で教育を受けていなければ、護林員にはなれないというわけである。こうして、少なくとも制度上、森林保護における彼らヨゴル人たちの経験や知識は、認められていないのである。

おわりに

本章は二〇〇四年二月時点でのA村の人びとの間に広がる「生態移民」の「噂」を扱ったものである。だが、二〇〇四年六月一五日の『甘肅日報』をみるかぎり、肅南ヨゴル族自治県において「生態移民」はもはや噂ではなくなった。肅南ヨゴル族自治県は祁連山国家級自然保護区において「二〇〇四年三月から、国家や省の支持のもとに生態移民事業を開始した。三年から五年の時間をかけて、核心区に生活している農民や牧畜民を交通の便、自然条件の比較的良好な平原河川流域に移住させる。これをつうじて森林に対する人間の居住によってもたらされる圧力を軽減し、森林を休息させることができる」とされる。そして、

具体的には、「生態移民事業において四〇〇〇人余りの住民は移住する必要がある。県の党委員会や政府は、明海、前灘、白銀などの郷において移民を受け入れるための基地を建設し、計画的に移民をおこなう」という計画も出された。さらに、生態移民事業が安定したかたちでおこなわれるために、「県政府は幹部たちを農牧民のところに派遣し、説得作業をおこなっている（後略）」とある（殷尚清 二〇〇四）。これに、A村でも「生態移民」が現におこなわれているとは断言できないが、今後おこなわれる可能性はますます高まるだろう。

一九五〇年代以来祁連山地域において、大規模な森林伐採がおこなわれてきた。それが「略奪的」であったがゆえに、生態系は破壊されてしまった。一九九〇年に入ってから森林などは保護の対象となった。森林伐採は、自然は人間によって「征服」されるべきものとの認識にたっておこなわれたものであり、伐採と保護は、相反するかのように見える。しかしながら、「人間は自然を保護するべきだ」という認識は、そもそも人間と自然は異なる、（ほとんどの場合は）対立項に位置する存在であるという觀念に基づくものである。そういう意味で、「征服」も「保護」も同一觀念に基づく行為であり、同一觀念の、時代に応じた異なる現れだといえる。他方、諸々の伝説やタブーに代表されるように、地域住民は木を倒すことを人間を殺すことに等しいと認識し、自然と人間をほぼ同一視する文化をもつ。彼らは自然を「敵」としていてもいなければ、守るべき「対象」とも考えていない。「自然認識」という言い方が彼らのなかでも成り立つとすれば、彼らの「自然認識」の特徴は自然を客体化しないという点にあり、こうした態度が、結果

的には、自然に対する人間の欲望を制御する機能を果たした、といえる。

このように、政策の論理と彼らの論理とは必ずしも合致しているとはいえない。それゆえに、自然と調和してきた彼らはその自然から排除されようとしている。だが、彼らを移住させることが、真に「自然保護」の実をあげることにつながるのかどうか、筆者は一抹の疑問を感じる。生態移民の効果について、科学的な検討が必要であろうが、自然と共存してきた人びとが、長年その地で蓄積してきた智慧が、森を守ってきたことを忘れてはならない。生態系保全事業が持続的なものになりうるかどうかは、異なる文化の存在が実質的に保障されるかどうかに深くかかっている。異なる生活空間においては、必ずその空間によりふさわしい人間のあり方が存在するはずである。そのあり方のひとつのあらわれとして「自然認識」にさまざまな民族の伝統文化がある。社会現実的な権力関係においては、センターとローカルといった主従の配置が存在したとしても、人間の異なる自然認識やそれを支える異なる論理の間の関係は原理的に同等なはずである。このことを深く心に留め、多様な認識や論理の共存を認めるならば、常にわれわれの前には、多様な可能性が広がるであろう。

●注

*1 調査地に関するより詳細な情報は（シンジルト 二〇〇四）を参照。

●参考文献

- 安 金玲 二〇〇二「祁連山区天然林保護対策建議」『甘肅林業』第六期：一六一—一七。
- 本刊編集部 一九九九「歷史的發展 歷史的成就——甘肅林業五〇年回眸」『甘肅林業』第四期：一〇—二一。
- 陳大慶・管小英 二〇〇三「張掖市祁連山林區實施生態移民的必要性和可行性」『甘肅林業』第四期：七—八。
- 陳 剛 二〇〇二「祁連深處護綠忙——前進中的張掖地區寺大隆林場」『甘肅林業』第一期：二—三。
- 陳 金元 二〇〇〇「祁連山水源涵養林的保護與可持續發展」『甘肅環境研究與監測』第一三卷、第四期：二三五—二三八。
- 戴 興忠 一九九七「祁連自然保護區四六年無火災」『消防月刊』第一期：一二。
- 傅輝恩・吳彪・寧學成 一九八四「小蠹虫外激素引誘試驗初報」『昆蟲研究』第五期：二二—二五。
- 甘肅省八屆人民代表大會常務委員會 一九九七「甘肅祁連山國家級自然保護區管理條例」。
- 郭利華・王順彥 一九九九「深山創大業、林海譜新曲」『甘肅林業』第四期：一五。
- 侯煜・殷尚清・李滿福 二〇〇一「祁連探綠——黑河流域國家級生態功能保護區」追蹤（上篇）『甘肅日報』一二月二〇日第一面。
- 李柏春・白志強・張建奇・孫小霞 二〇〇三「祁連山自然保護區與社區經濟發展對策探討」『甘肅林業科技』第二八卷、第三期：三三—三五。
- 李 鈇 一九九八「莫失祁連山——甘肅省祁連山水源涵養林保護綜述」『甘肅林業』第一期：七一—九。
- 李小林・肖玉春 一九九八「在河西走廊與祁連之間」『民族團結』第二期：三九—四二。
- シンジルト 二〇〇四「黑河上流域の人と自然——青海省チレン県・甘肅省肅南県での調査報告」総合地球環境学研究 所・オアシスプロジェクト研究会「オアシス地域研究会報」第四卷、第一期：一一—一三〇。
- 鉄穆爾 二〇〇四「失我祁連山」『延安文學』第五期：一六〇—一六五。
- 張虎・張宏斌 二〇〇二「祁連山寺大隆林區積雪變化趨勢與氣溫和降水」『甘肅林業科技』二七卷、第二期：一一—一四。

常学向・趙愛芬・王金葉・常宗強・金博文 二〇〇二「祁連山林区大気降水特征与森林对降水的截留作用」『高原氣象』

第二一卷、第三期・二七四—二八〇。

趙成章・樊勝岳・殷翠琴 二〇〇四「祁連山区天然草原退化原因分析与可持續利用对策」『中国沙漠』二二四卷、第二期・

二〇七—二一〇。

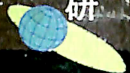
殷 高清 二〇〇四「緩解林区人居压力增强水源涵养功能——兩南生態移民造福農牧民」『甘肅日報』六月一五日。

王 多尧 二〇〇一「封山育林增强祁連山水源涵養林效能」『甘肅林業科技』第二六卷、第四期・五二—五四。

王 景榮 一九八三「發生在祁連山北麓的一次泥石流」『永川凍土』第五卷、第二期。

王 順彦 一九九四「關於甘肅林業企業管理中的幾個問題」『中国林業企業』第一期・五三—五四。

地球研
叢書



中国の環境政策 生態移民

緑の大地、内モンゴルの
砂漠化を防げるか？

小長谷有紀
シンジルト
中尾正義
編

昭和堂

地球叢書



小長谷有紀+シンジルト+中尾正義 編

中国の環境政策

生態移民

緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？

昭和堂



9784812205235

ISBN4-8122-0523-9

C1036 ¥2800E

定価：(本体2,800円+税)



1921036028006

